
貨物語

熱血バレー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貨物語

【コード】

N0840Z

【作者名】

熱血バレー

【あらすじ】

「僕は君から人間強度を学んだんだ」

阿良々木達のクラスに突如やってきた謎の転校生不死原
旭^ひ

それは、阿良々木がもう二度と会うはずのない人だった。

今、阿良々木の悲しき過去と彼女の想いが交差する！！！！

『探し求めた』 淡く寂しい今と昔の物語

君がため、

名前としては、“たからものがたり”と読んでください。
ちなみに、この作品は偽物語と猫物語の間の話にしようと考えています。

怪異に関わると怪異に引かれやすくなる、と言われるが多分本当のことであろう。

戦場ヶ原ひたぎは、蟹に行き会い

八九寺真宵は、蝸牛に迷い

神原駿河は、猿に願い

千石撫子は、蛇に巻き憑かれ

羽川翼は、猫に魅せられた。

そして僕、阿良々木暦は、吸血鬼に襲われた。

そんな僕らを助けたのが年齢不詳のアロハ男、忍野メメだった。でも彼は、助けたと言わず、必ずこう言うのだ。

「勝手に助かるだけ」

そう、彼は軽薄で、皮肉屋で、悪趣味で、意地悪で、不遜で、お調子者で、性悪で、不真面目で、子芝居好きで、気まぐれで、わがままで、嘘つきで、不正直なのだ。しかし、彼は怪異譚の蒐集と調査を終え、この町を去った。

僕らに、別れ一つ言わずに……

のはずだったのだが、今僕の目の前にはアロハシャツを着たおっさんがいる。忍野メメだった。

最近、変わったことといえばガハラさんのデレ度がより一層、ひどくなった。

例えば、清掃時には必ず羽川の通る所のみ、入念に掃除をするそうだ。もちろん、僕にだって最近優しくなった。絵文字入りメールは毎日届く（脅迫染みた内容ではないのでご安心を）し、筆記道具も凶器として使わず、ちゃんとした用法で使っている。深窓の令嬢と呼ばれていたときの面影は、いまやもうない。

羽川は、けじめなどといって髪をばつさり切り、大胆なイメチェンをし、学校中を騒がせたのも記憶に新しい。（ガハラさんも髪をショートにした。）
それが原因かは分からないが、最近毒舌家への道を歩んでいる。口調が以前よりも厳しくなったのだ。（特に僕だが。）

っと言っても最近は大きな変化は見られず安心していただけだが、今日そんな平凡な日々^{ビシネット}に終止符を打つことになった。

皆は、転校生と言う言葉を聞き何を思うだろうか。僕は、
うともちろん顔、

ギロツ！！（by心優しきガハラさん）

ではなく、どこのクラスかっと言うことである。そして、その転
校生は僕と同じクラスだった。

先生の挨拶で、その転校生がドアに足で開けた。

訂正、転校生が足で教室のドアを吹っ飛ばした。

まずい。相当危ないにおいが漂ってきた。これが怪異臭というも
のなのか。

そして、僕の大きい妹、火憐よろしく、逆立ちでのご登場だった。
これで、足でドアを吹っ飛ばした訳が分かった。火憐と同じく、体
を鍛えすぎて力が有り余っているのです、こうなったのであろう。

そして、火憐同様、きれいに着地してから（まずいことに女子で
ありながら火憐をも上回る身長を持ち主のようだ。しかも、スタイ
ル抜群、顔も誰もが可愛いに認定するであろうほどの美女だった。）
紹介を始める。

「えー転校してきた不死原旭ふしげんあさひです。よろしく。」

僕は生涯、もう二度と聞くはずのなかった名前を今日聞いた。そして、放課後の今に至る。

例の廃墟に、忍野メメはいたのだった。わざわざ、僕をそこに呼び出し、何か重大なことが始まるうとしている、そんな予感がしていた。

「で、久しぶりだが何のようなんだ？この町の怪異譚の蒐集と調査を終わったんだろ。」

「ああ、終わったけれども。でも、また新しいのが出てきそうなんだ。」

予想通り。あの忍野でさえ緊急事態でこの町に来ているのであった。そして、またも僕の予想通りの発言を忍野はしたのだった。

「ところで、阿良々木君。最近、変わったことはあったかい？例えば……」

変まわりつた転校生が来たりした？」

「変わった転校生が来たりした？」

「ああ。」

「やっぱりね。」

「つで、その新しい怪異はなんなんだ？」

「まだ、言えないな。でも、阿良々木君はこれ以上関わらないほうがいい。ここからはプロの出番さ。」

「無理だな。」

「阿良々木君ならそう言うと思っていたよ。でも今回ばかりは君以来のことが起きているんだ。」

「!？」

「つまり、エネルギーさ。この周辺を狂わすほどの力を持った怪異がこの町にやってきたのさ。ねえ委員長ちゃん、いやこの状態でその呼び方はまずいね。」

そこには、最近登場回数が多いブラック羽川がいた。

「気付いてたのにや、人間。」

「今回の登場も、委員長ちゃんのストレスが原因かい？」

「今回は違うにゃん。ご主人はストレスにゃんかこれっぽっちも溜まってないにゃん。」

ちなみに、今の羽川の服はパジャマである。本当に、羽川は私服を持っているのだろうか、と疑問になるが、今はそんな話はどうでもいいのだ。

「たぶん、あの転校生のせいにゃん。あの転校生が来てから、この土地も変わったにゃん。にゃんというか、怪異の町にでもなりそうな強力な力を感じるにゃん。それに・・・やっぱいいにゃん。」

「それに、とはどういうことだい？何か手がかりがあれば教えてほしいんだが。」

「これは、ご主人個人の問題にゃん。人間がご主人のプライデートを知ろうとするにゃんてにゃんて悪趣味にゃんだにゃん。」

「（にゃんが多くて可愛い・・・）」

「阿良々木君、一人別のことを考えないでくれるかな。」

「うっ!」

「それで、その問題ってまさか委員長長ちゃんがその子に勉強で負けたとか？」

「ち、違うにゃん!」

「凶星か、当たりみたいだね。」

「にやかにやか鋭い人間にや。転入試験の問題がすべて満点だったそうにや。」

「転入試験ってこの前のテストをそのまま使ったんだろ。」

「阿良々木君、存在感薄すぎて気付かなかったよ。」

「おい、それはひどいぞ。」

「転入テストの情報なんて、どこから仕入れたんだい？あのツンデレちゃんからかい？」

シカトすんな、としつかり言ってるから、

「そうだよ。それでこの前のテストって羽川は社会で一問、本人の懂れるケアレスミスで満点を逃したはずだぜ。」

「だから、問題にやん。今で学校のトップだったご主人を超えたとして、みんなや大騒ぎにやん。それで、試験を受け直させても結果は満点にや。」

「それが委員長さんのストレスになったんじゃないか？今まで不動の一位だったわけだし、家庭の事情も考えると、溜まるんじゃないかい？」

「そんなにやことにかかったにやん。ご主人は一時ストレスを溜めたけどすぐに元に戻ったにやん。逆に今回の結果で安心した感じもあつたくらいにやん。」

「安心？」

「そうにゃん。ご主人は「これで優等生も終わるにゃー」って言うてたにゃん。」

きつと「終わるんだ。」って感じだったと思うぞ。羽川も一位であることが重荷だったんだな。

「でも、最近ご主人のストレスがにゃいのに俺が出てきちゃうにゃん。」

忍野は一人で何か考え込む仕草をしてから、検証さ、っと言って忍を呼び出した。

「なんじゃ。僕の眠りを妨げるのはどこのどいつじゃ。」

どこの魔人様だよ、っつつつこみたくなるセリフである。

「ああ、お前様か。久しぶりじゃな。」

いつもと変わらない会話である。でも、おかしい。僕は忍が影に住むようになり、最近血を与えていない。しかしだ。いつもなら8歳位の見た目の忍が、なぜ月火くらいの見た目であるのだ。つまり、

怪異としての力が、強まっていたのだ。

メメの言うとおり、この町の怪異の力は暴走し事態は深刻であった。つととなると心配どころは神原か。

「変態ちゃんは心配ないよ。だって、あの怪異は願いを叶える怪異だから、願い事がない限り力は発揮されないさ。」

「勝手に悟るな。」

「あ、ごめんごめん。でもそれは本当さ。変態ちゃんのことは安心して大丈夫さ。それよりも大変なことは君のほうじゃないか？」

「え!？」

「そういえば、ご主人もあいつには何か窺ってる感じじゃったにや。」

「さすが委員長ちゃんだね。」

「それで、今回の件で僕になんの問題があるんだ？」

「正確には忍ちゃんのほうかな？今回の怪異は西洋のほうから来た怪異みたいだからね。」

「やはりそうじゃったか。」

「だから、なんなんだその怪異？」

「ウエアウルフ」

「ウエアウルフ？」

「つまり狼男ってとこさ。いや、この場合は狼女か。」

「旭ちゃんが狼女？」

「旭ちゃん？」

「旭ちゃんって言うのは、今日来た転校生で僕の幼馴染だ。」

「狼人間なのに、名前が旭とはなんともひねくれてるね。そういえば、変態ちゃんも同じ感じだったか。っというか阿良々木君に幼馴染なんていたんだ。」

「いるだよ、幼馴染くらい。でも、旭ちゃんはもう昔に死んでるはずなんだ。」

「死んでいるのに生きてるってわけか。」

「そうだ。」

「狼人間は、狼憑きとも言われる憑依系の怪異でね。その力は吸血鬼をも凌駕するほどさ。きつと生前何らかの方法でその子に乗り移ったんだとしたら、生きていって不思議じゃない。彼らも一様不死身だからね。特に今回のはその中でもかなり格上かな。」

「今回ののは、狼の輩のトップじゃ。あやつは、儂らの仲間も何人も殺つておると聞く。怪異の中の実力も折り紙つきじゃな。」

「今のお前じゃ勝てそうか？」

「三分でチンしてしまうな。」

「カップラーメンか、お前は。」

「お前様、何を言っておるのじゃ。元の儂でも勝率は五分程度じやろう。」

「いや、狼の長にもなれば記憶の繋ぎが可能じゃないかな？」

「確かにその可能性もあるのー。つまり3割つてとこじやのー。」

「でも敵と決まったわけじゃないんだろ。なら、安心できるんじゃないか？」

「何を言っておるのじゃお前様。怪異の王である儂があやつと戦わないわけなからう。」

「.....」

「何をぼーとしておるのじゃお前様。今日から特訓じゃ、特訓。あやつに勝つための必勝法をお前様に授けようぞ。」

「だから、旭ちゃんは僕の幼馴染なんだが。」

「怪異に、幼馴染もなからう。力だけがものを言うのが怪異の世

界じゃ。」

「僕たちは人間界の住民だ。」

「お前様は怪異と人間の境目じゃろうが。」

「お前もな。」

「つまり、国籍と一緒にじゃ。どっちに転がっても良い、便利じゃのー。」

「だったら、僕は人間になりたい。」

「この姿はお前様が自分で選んだ姿であろう。つべこべ言わず修行じゃ!！」

そして、僕は望まぬ決戦に向けての修行に臨んだのであった。

あさひウルフ

003 (後書き)

なんだか、今回会話だけになってしまいました。

・・・やはり、西尾維新先生はすごい方です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0840z/>

貨物語

2011年12月11日01時49分発行